

埼玉県さいたま市とその周辺に残る 1923 年関東地震に関する石碑の継続調査

The continued study of the memorial stone of the 1923 Kanto Earthquake in and around Saitama City, Saitama Prefecture

石黒 喬大^{1*}; 小林 優介^{1*}; 西山 享佑^{1*}; 安倍 聡志¹
SHIRAHATA, Futaro^{1*}; YOKOYAMA, Tatsuro^{1*}; TAKADA Yuya^{1*}; UTIDA, Soma¹; MOGI, Kosei¹

¹ 栄東高等学校

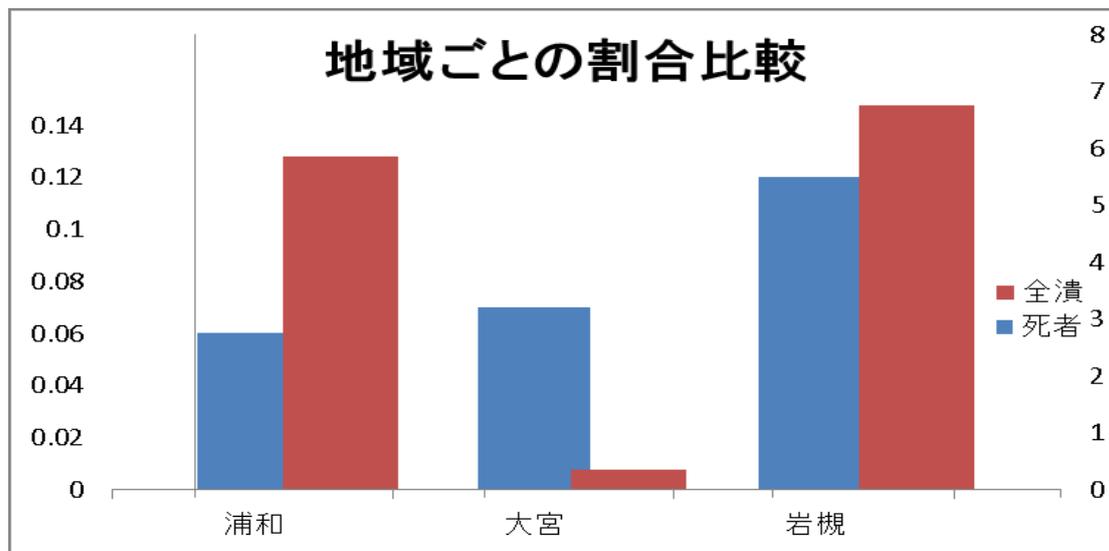
¹ Sakae-Higashi High School

本校の理科学研究部では、2013 年より 1923 年関東地震に関する記述のある石碑について調査を行っている。昨年は地元である埼玉県さいたま市を調査し、「歴史地震」第 29 号に調査結果を掲載していただいた。

本研究は昨年からの継続調査であり、調査地域をさいたま市から、春日部市、越谷市、川口市と拡大して行った。その中からこの予稿ではさいたま市に関して述べることにする。さいたま市は 4 つの市（浦和・大宮・与野・岩槻）が合併して誕生した。

まず、さいたま市域の当時の地盤や震度について述べると、旧大宮市や旧与野市はそのほとんどが大宮台地から成り、地盤が堅い。一方、旧浦和市や旧岩槻市は荒川低地や中川低地が広がっており、地盤がかなりもろい。これらの影響があつてか、旧浦和市や旧岩槻市は震度 6 弱～7 と非常に強い揺れが発生し、住家に多大な被害をもたらした。旧大宮市や旧与野市は 5 弱～5 強と比較的揺れが小さく、住家の被害は少なかった。

また、先行研究から死者数や住家の全潰戸数を調べた。下のグラフは、各地域の死者数と住家の全潰数を%で表したものである。死者は左の軸の値、全潰は右の軸に沿っている。



浦和や岩槻では全潰と死者がともに多いが、大宮は全潰の割合が低いにもかかわらず浦和以上の死者を出していることが分かる。これは、大宮町の工場による被害が影響している。その中でも代表的で、今回の調査において石碑も見つかった旧国鉄大宮工場（現 JR 大宮駅周辺）の被害について述べる。

旧国鉄大宮工場は 1894 年に業務を開始し、1927 年には約 74000 m²の広さを持っていた。地震当日は午前 11 時 30 分より昼休みになっており、職員は日陰を求めて休憩中であつた。そこに工場の建物や煙突が崩れ落ちたため、その下敷きとなり死者 24 名、負傷者 21 名を出した（大宮市では計 35 名の方が亡くなっている）。地震によって建物や煙突が崩壊した原因は、その多くがレンガ造りであつたためであり、鉄筋で作られた建物は地震の後でも作業を続けることができたという。

以下に旧国鉄大宮工場（現大宮総合車両センター）にある石碑の碑文を記述する（/は改行を表している）。

思い出の碑 / この石碑は当工場創立当時旧旋盤 / 職場の入口に掲げられていたもので / 大正十二年の関東大震災の際このように二つに割れてしまつたが創業の / 形見にそのままの姿で保存されてい / たものである / 顧みれば創立当時の工場作業を軌道に乗せるまでの先人の労苦がにじみ出ているような気がする / 碑石にして心あらばこの国の鉄道 / 工場の技術が国外まで飛躍した頃の / 繁栄に酔うた喜びも知っているである / うし敗戦の混乱に破壊しつくされよ / うとした車を眺めて悲しみに涙を止め得なかつた事もあつたであろう / 悲喜六十年先人の歩んだ道を知る / この石に礎を置きわが大宮工場の明 / るい前進の道しるべとしたい / 昭和二十七年十月十四日 / 国鉄八十周年記念日を祝して / 日本国有鉄道大宮工場長小谷秀三

石碑上部の看板部分は明治 28 年に作られたが、関東地震の際に被害を受けた。このことを後世に残すために新たに碑文をつけたものとみられる。

先程述べたとおり旧国鉄大宮工場は、レンガ造りで耐震補強の十分でない建物に大きな被害が出た。今でこそ耐震補強の無い建物はほとんどなくなったが、このような事例があったことをしっかりと受け止めなければならない。

さいたま市の石碑においては、慰霊碑や供養塔は少なく復興を記念するものが多い傾向があった。本研究はこのように地域の被害を先行研究から調べ、可能な地域では石造物調査を行った。



旧国鉄大宮工場に関する石碑